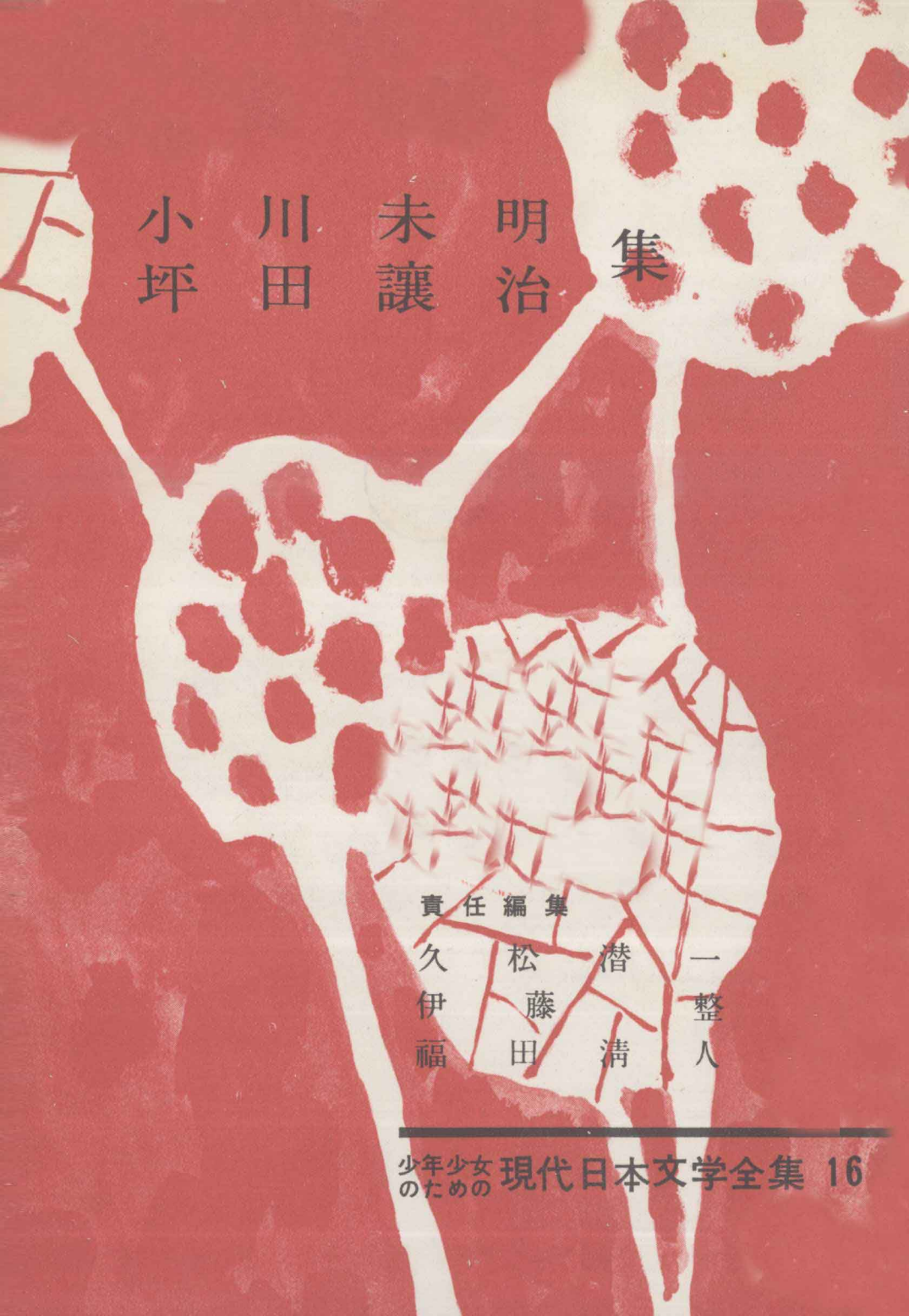
少年少女のための

現代日本文学全集

16

小川未明
坪田譲治 集



責任編集

久松潜一
伊藤整
福田清人

少年少女のための 現代日本文学全集 16

NDC 918.6

少年少女のための
現代日本文学全集16

小川未明・坪田譲治集

定価　二五〇円

昭和三十年十月二十七日　初版発行

昭和三十二年三月十八日　再版発行

発行者　小嶺嘉太郎

発行所　東西文明社

営業所　千代田区神田神保町二ノ二一

印刷　東京印刷株式会社
製本　帝都製本所

この本を読む人に

すぐれた文学者は、この世や人間の真実や、美をするどくみつめて、その作品にはっきりとえがいてくれております。私たちは、それを読むことによって、私たちの心をゆたかに、美しくすることができます。

この本には、そうしたすぐれた作家たちの代表的な作品のなかから、さらに少年少女のみなさんが、読むのにふさわしいもの、ぜひ読んでもらいたいものを、えらんでのせてあります。そして学校で教わらないむずかしい漢字は、かなに改めたり、その意味をしるしたり、またかなづかいも、現代かなづかいになおして、みなさんにしたしみやすいようにしてあります。

その作品も作家のいろいろな面を示すようにしてありますが、あまりに長すぎて、この本にのせきれない作品や、もっとおとなになってから読んだほうがいい部分をふくむものは、その一部をとってのせてあるものもあります。その部分のとりかたもくふうして、その作品のあらましを知られるようにつとめました。

しかし、もちろん原作をこのように改めたといっても、原作の意図およびそ

の味わいなどは、できるかぎり、そこなうことなく伝えることができるよう苦心しました。だから実際は、このままを原作と考えても、さしつかえがないと思っております。

最後に、解説として、その作家の一生や、その作品の説明がつけられております。一つの作品をよく味わうには、それがどのような作家によって書かれたか、その作家の一生、ひととなりを知ることは、きわめてたいせつであります。それで初めに、解説のほうを読んでから作品のほうを読むことも、作品をよく理解することができる方法でしょう。

この解説も、それを書いた人々が、たいへん興味ふかく、親切にしるしてくれておりますのできっと、作品を読むように、みなさんの心をひきつけてくれるでありましょう。

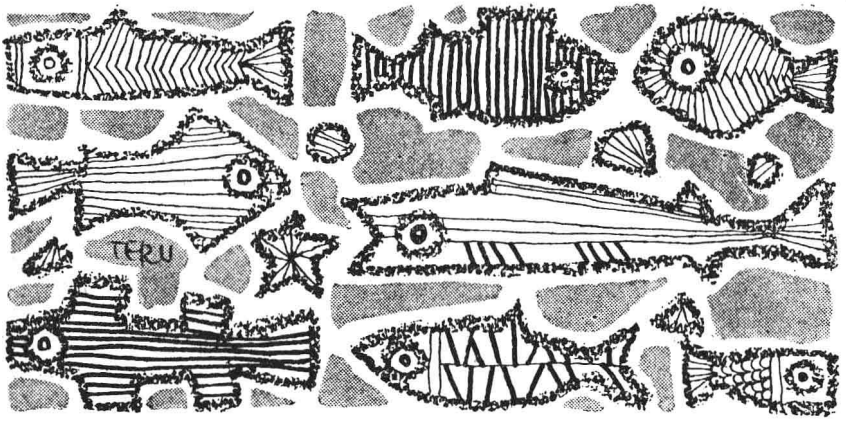
編集者　久松潜一
　　伊藤整
　　福田清人

＊本文中、唐（むかしの中国の名）のように、かっこの中に小活字で入れてあるのは、編集部でつけた注です。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

小川未明集もくじ

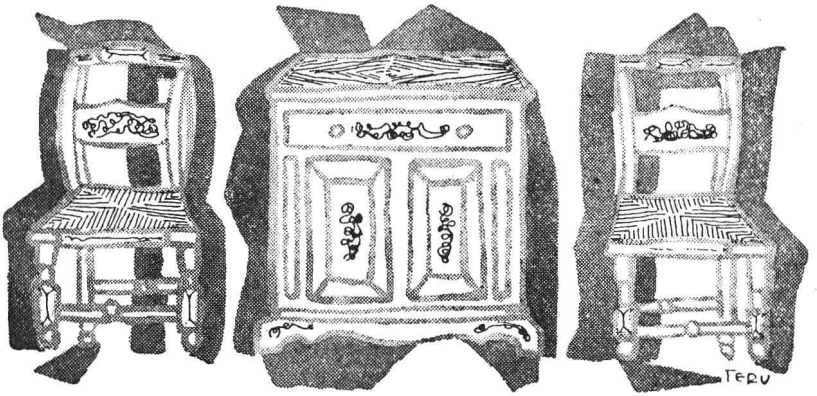
赤いろうそくと人魚……七
港についた黒んぼ……一六
雪来る前の高原の話……二五
月夜とめがね……三三
或る夜の星たちの話……三七
野ばら……四三
二人のかるわざ師……四七
蘭の花……五二
金歯……五八
めがね……六八
たましいは生きている……七九
とうげの茶屋……八五
小さい針の音……九三
新しい町……一〇〇
かたい大きな手……一〇五
解説　古谷綱武……一一一



坪田譲治集もくじ

善太の四季……一二九
日まわり……一四八
鶴……一六六
一匹の鮒……一七七
岩……一八八
小獅子小孔雀……一九五
びわの実……二〇三
犬と友だち……二一一
よるの夢ひるの夢……二三一
解説　古谷綱武……二三五

そうてい　青山龍水
カット　山本耀也



小川未明集

赤いろうそくと人魚

一

人魚は南のほうの海にばかりすんでいるのではありません。北の海にもすんでいたのであります。

北方の海の色は、青うございました。あるとき、岩の上に、女の人魚があがって、あたりのけしきをながめながら休んでいました。

雲間からもれた月の光がさびしく、波の上を照らしていました。どちらを見ても限りない、ものすごい波がうねうねと動いているのであります。

なんというさびしいけしきだろうと人魚は思いました。自分たちは、人間とあまりすがたは変わっていない。魚や、また底深い海の中にすんでいる、気のあらい、いろいろなけだものらとくらべたら、どれほど人間のほうに、心もすがたも似ているかもしれない。それだのに、自分たちは、やはり魚や、けだものらといっしょに、冷たい、暗い、気のめいりそうな海の中にくらさなければならないというのは、どうしたことだろうと思いました。

長い年月の間、話をする相手もなく、いつも明かるい海の面をあこがれて、くらしてきたことを思いますと、人魚はたまらなかったのであります。そして、月の明かるく照らす晩に、海の面にたたずんで岩の上に休んで、いろいろな空想にふけるのが常でありました。

「人間の住んでいる町は、美しいということだ。人間は、魚よりも、またけだものよりも、人情があってやさしいと聞いている。私たちは、魚やけだものの中に住んでい

るが、もっと人間のほうに近いのだから、人間の中にはいってくらされないことはないだろう。」と、人魚は考えました。

その人魚は女でありました。そして身持ちでありました。……私たちは、もう長い間、このさびしい、話をするものもない、北の青い海の中でくらしてきたのだから、もはや、明かるい、にぎやかな国は望まないけれど、これから産まれる子供に、せめても、こんな悲しい、たよりない思いをさせたくないものだ。……

子供から別れて、ひとり、さびしく海の中にくらすということは、この上もない悲しいことだけれど、子供がどこにいても、しあわせにくらしてくれたなら、私の喜びは、それにましたことはない。

人間は、この世界の中でいちばんやさしいものだと聞いている。そして、かわいそうな者や、たよりない者は決していじめたり、苦しめたりすることはないと聞いている。いったん手づけたら、決して、それをすてないとも聞いている。さいわい、私たちは、みんなよく顔が人間に似ているばかりでなく、胴から上は人間そのままなのであるから——魚やけだものの世界でさえ、くらされるところを思えば——人間の世界でくらされないことはない。一度、人間が手に取り上げて育ててくれたら、きっとむじひにすてることもあるまいと思われる。……

人魚は、そう思ったのでありました。

せめて、自分の子供だけは、にぎやかな、明かるい、美しい町で育てて大きくしたいという情から、女の人魚は、子供を陸の上に産み落そうとしたのであります。そうすれば、自分は、ふたたびわが子の顔を見ることはできぬかもしれないが、子供は人間のなかま入りをして、幸福に生活をすることができるであろうと思ったのです。

はるか、かなたには、海岸の小高い山にある、神社のあかりがちらちらと波間に見えていました。ある夜、女の人魚は、子供を産み落すために、冷たい、暗い波の間を泳いで、陸のほうにむかって近づいて来ました。

二

海岸に、小さな町がありました。町には、いろいろな店がありましたが、お宮のある山の下に、貧しげなろう

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

そくをあきなっている店がありました。

その家には、年よりの夫婦が住んでいました。おじいさんがろうそくを造って、おばあさんが店で売っていたのであります。この町の人や、また付近の漁師がお宮へお参りをするときに、この店に立ち寄って、ろうそくを買って山へ上りました。

山の上には、まつの木がはえていました。その中にお宮がありました。海のほうからふいてくる風が、まつのこずえに当たって、昼も、夜も、ごうごうと鳴っています。そして毎晩のように、そのお宮にあがったろうそくの火かげが、ちらちらとゆらめいているのが、遠い海の上から望まれたのであります。

ある夜のことでありました。おばあさんは、おじいさんにむかって、

「私たちが、こうしてくらしているのも、みんな神様のおかげだ。この山にお宮がなかったら、ろうそくは売れない。私どもは、ありがたいと思わなければなりません。そう思ったついでに、私は、これからお山へ上ってお参りをして来ましょう。」と、言いました。

「ほんとうに、おまえの言うとおりだ。私も毎日、神様をありがたいと心ではお礼を申さない日はないが、ついつい用事にかまけて、たびたびお山へお参りに行きもしない。いいところへ気がつきなされた。私の分もよくお礼を申して来ておくれ。」と、おじいさんは答えました。

おばあさんは、とぼとぼと家を出かけました。月のいい晩で、昼間のように外は明かるかったのであります。お宮へおまいりをして、おばあさんは山をおりて来ますと、石段の下に、赤んぼうが泣いていました。

「かわいそうに、捨て子だが、だれがこんな所にすてたのだろう。それにしても不思議なことは、おまいりの帰りに、私の目に止まるというのは何かの縁だろう。このままに見すてて行っては、神様のばちが当たる。きっと神様が、私たち夫婦に子供のないのを知って、お授けになったのだから、帰っておじいさんと相談をして育てましょう。」と、おばあさんは心の中で言って、赤んぼうを取り上げながら、

「おお、かわいそうにかわいそうに。」と、言って、家へだいて帰りました。

おじいさんは、おばあさんの帰るのを待っていますと、おばあさんが、赤んぼうをだいて帰って来ました。そして、一部始終をおばあさんは、おじいさんに話しますと、「それは、まさしく神様のお授け子だから、だいじにして育てなければばちが当たる。」と、おじいさんも申しました。

ふたりは、その赤んぼうを育てることにしました。その子は女の子であったのです。そして胴から下のほうは、人間のすがたでなく、魚の形をしていましたので、おじいさんも、おばあさんも、話に聞いている人魚にちがいないと思いました。

「これは、人間の子じゃあないが……」と、おじいさんは、赤んぼうを見て頭をかたむけました。

「私も、そう思います。しかし人間の子でなくとも、なんと、やさしい、かわいらしい顔の女の子でありませんか。」と、おばあさんは言いました。

「いいとも、なんでもかまわない。神様のお授けなさった子供だから、だいじにして育てよう。きっと大きくなったら、りこうな、いい子になるにちがいない。」と、おじいさんも申しました。

その日から、ふたりは、その女の子をだいじに育てました。大きくなるにつれて、黒目がちで、美しい髪の、膚の色のうす紅をした、おとなしいりこうな子となりました。

三

むすめは、大きくなりましたけれど、すがたが変わっているので、はずかしがって顔を外へ出しませんでした。けれど、一目そのむすめを見た人は、みんなびっくりするような美しい器量でありましたから、中にはどうかしてそのむすめを見たいと思って、ろうそくを買いに来た者もありました。

おじいさんや、おばあさんは、

「うちのむすめは、内気ではずかしがりやだから、人様の前には出ないのです。」と、言っていました。奥の間でおじいさんは、せっせとろうそくを造っていました。むすめは、自分の思いつきで、きれいな絵をかいたら、みんなが喜んでろうそくを買うだろうと思いましたから、

そのことをおじいさんに話しますと、そんならおまえのすきな絵をためしに書いてみるがいいと答えました。

むすめは、赤い絵の具で、白いろうそくに、魚や、貝や、または海草のようなものを、生まれつきでだれにも習ったのではないがじょうずにかきました。じいさんは、それを見るとびっくりいたしました。だれでも、その絵を見ると、ろうそくがほしくなるように、その絵は、不思議な力と美しさとがこもっていたのであります。

「うまいはずだ。人間ではない、人魚がかいたのだもの」と、おじいさんは感嘆して、おばあさんと話し合いました。

「絵をかいたろうそくをおくれ」と、言って、朝から晩まで、子供や、おとながこの店へ買いに来ました。はたして、絵をかいたろうそくは、みんなに受けたのであります。

すると、ここに不思議な話がありました。この絵をかいたろうそくを山の上のお宮にあげて、その燃えさしを身につけて、海に出ると、どんな大あらしの日でも、決して、船がてんぷくしたりおぼれて死ぬような災難がないということが、いつからともなく、みんなの口々にうわさとなって上りました。

「海の神様を祭ったお宮様だもの、きれいなろうそくをあげれば、神様も、お喜びなさるのにきまっている。」と、その町の人々は言いました。

ろうそく屋では、ろうそくが売れるので、おじいさんはいっしょうけんめいに朝から晩まで、ろうそくを造りますと、そばでむすめは、手のいたくなるのもがまんして、赤い絵の具で絵をかいたのであります。

「こんな、人間なみでない自分をも、よく育てて、かわいがってくだすったご恩をわすれてはならない。」と、むすめは、老夫婦のやさしい心に感じて、大きな黒いひとみをうるませたこともあります。

この話は遠くの村までひびきました。遠方の船乗りや、また漁師は、神様にあがった絵をかいたろうそくの燃えさしを手に入れたいものだというので、わざわざ遠いところをやって来ました。そしてろうそくを買って山に登り、お宮に参詣して、ろうそくに火をつけてささげ、その燃えて短くなるのを待って、またそれをいただいて帰

りました。だから、夜となく、昼となく、山の上のお宮には、ろうそくの火の絶えたことはありません。ことに、夜は美しく、あかりの光が海の上からも望まれたのであります。

「ほんとうに、ありがたい神様だ。」と、いう評判は世間に立ちました。それで、急にこの山が名高くなりました。

神様の評判は、このように高くなりましたけれど、だれも、ろうそくに一心をこめて絵をかいているむすめのことを、思う者はなかったのです。したがって、そのむすめをかわいそうに思った人はなかったのであります。むすめは、つかれて、おりおりは、月のいい夜に、窓から頭を出して、遠い、北の、青い青い海を恋しがって、なみだぐんでながめていることもありました。

四

あるとき、南のほうの国から、香具師（道ばたで品物を売ったり見せ物をする人）がはいって来ました。何か北の国へ行って、めずらしいものをさがして、それをば南の国へ持って行って、金をもうけようというのであります。

香具師は、どこから聞きこんで来たものか、または、いつむすめのすがたを見て、ほんとうの人間ではない、実に世にめずらしい人魚であることを見ぬいたものか、ある日のこと、こっそりと年寄り夫婦のところへやって来て、むすめにはわからないように、大金を出すから、その人魚を売ってはくれないかと申したのであります。

年寄り夫婦は、最初のうちは、このむすめは、神様がお授けになったのだから、どうして売ることができよう。そんなことをしたら、ばちが当たると言って承知をしませんでした。香具師は一度、二度断られてもこりずに、またやって来ました。そして年寄り夫婦にむかって、「むかしから人魚は不吉なものとしてある。今のうちに、手もとからはなさないと、きっと悪いことがある。」と、まことしやかに申したのであります。

年寄り夫婦は、ついに香具師の言うことを信じてしまいました。それに大金になりますので、つい金に心をうばわれて、むすめを香具師に売ることにやくそくをきめてしまったのであります。

香具師はたいそう喜んで帰りました。いずれそのうちに、むすめを受け取りに来ると言いました。

この話をむすめが知ったときは、どんなにおどろいたでありましょう。内気な、やさしいむすめは、この家からはなれて幾百里も遠い、知らない、熱い南の国へ行くことをおそれました。そして、泣いて、年寄り夫婦に願ったのであります。

「わたしは、どんなにでも働きますから、どうぞ知らない遠い南の国へ売られて行くことはゆるしてくださいまし。」と、言いました。

しかし、もはや、鬼のような心持になってしまった年寄り夫婦は、何といってもむすめの言うことを聞き入れませんでした。

むすめは、へやのなかにとじこもって、一心にろうそくの絵をかいていました。しかし、年寄り夫婦はそれを見ても、いじらしいとも、あわれとも、思わなかったのであります。

月の明かるい晩のことであります。むすめは、ひとり波の音を聞きながら、身の行く末を思うて悲しんでいました。波の音を聞いていると、なんとなく、遠くのほうで、自分をよんでいるものがあるような気がしましたので、窓から外をのぞいて見ました。けれど、ただ青い青い海の上は、月の光が、はてしなく、照らしているばかりでありました。

むすめは、また、すわって、ろうそくに絵をかいていました。するとこのとき、表のほうがさわがしかったのです。いつかの香具師が、いよいよこの夜むすめを連れに来たのです。大きな、鉄格子のはまった、四角なはこを車に乗せて来ました。そのはこの中には、かつてとらや、ししや、ひょうなどを入れたことがあるのです。

このやさしい人魚も、やはり海の中のけだものだと言うので、とらや、ししと同じように取りあつかおうとしたのであります。ほどなく、このはこをむすめが見たら、どんなにたまげたでありましょう。

むすめはそれをも知らずに、下を向いて、絵をかいていました。そこへ、おじいさんと、おばあさんとがはいって来て、

「さあ、おまえは行くのだ。」と、言って連れだそうと

しました。

むすめは、手に持っていたろうそくに、せきたてられるので絵をかくことができずに、それをみんな赤くぬってしまいました。

むすめは、赤いろうそくを、自分の悲しい思い出の記念に、二三本残して行ったのであります。

五

ほんとうにおだやかな晩のことです。おじいさんとおばあさんは、戸をしめて、寝てしまいました。

真夜中ごろでありました。とん、とん、と、だれか戸をたたくものがありました。年寄りのものですから耳ざとく、その音を聞きつけて、だれだろうと思いました。

「どなた？」と、おばあさんは言いました。

けれどもそれには答えなく、つづけて、とん、とん、と、戸をたたきました。

おばあさんは起きてきて、戸を細めにあけて外をのぞきました。すると、ひとりの色の白い女が戸口に立っていました。

女はろうそくを買いに来たのです。おばあさんは、少しでもお金がもうかることなら、決して、いやな顔つきをしませんでした。

おばあさんは、ろうそくのはこを取り出して女に見せました。そのとき、おばあさんはびっくりしました。女の長い黒髪が、びっしょりと水にぬれて、月の光にかがやいていたからであります。女ははこの中から、まっかなろうそくを取り上げました。そして、じっとそれに見入っていましたが、やがて金をはらって、その赤いろうそくを持って帰って行きました。

おばあさんはあかりのところで、よくその金をしらべてみると、それはお金ではなくて、貝がらでありました。おばあさんはだまされたと思って、おこって、家から飛び出して見ましたが、もはや、その女のかげは、どちらにも見えなかったのであります。

その夜のことであります。急に空のもようが変わって、近ごろにない大あらしとなりました。ちょうど香具師が、むすめをおりの中に入れて、船に乗せて、南のほうの国へ行くとちゅうで沖にあったころであります。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com